

中二生・高二生！ 覚悟しろ！

人間は、窮地になると、ものすごい力(能力)を発揮することがある。一方で、このままではまずいと思いつつも、動く気力がわいてこなくて、ポーツとしてしまつこともある。どちらが、生存の可能性を高めるかは自明だ。勿論、前者である。(これに、冷静な判断が加われば更によい。)14年前の阪神大震災時も、こうしたことが明暗を分けた。

同じテーマで身近なことを話そう。A君は、大学4年生。卒論の締切りまであと一週間。まだ百五十枚も書かなければならない。A君は、この一年卒論に向けて頑張ってきた。資料もすべてそろえてあり、あとはまとめるだけである。しかし、この2週間、全く筆が進まない。今日こそ頑張ろうと思つたが、ダメだ。その苦しさは耐えかねて、パチンコ屋に足を運ぶ日が続いている。今日もそうだ。心の中には、自己嫌悪があるが、パチンコをしていれば、その日は何とか過ごせる。そして、夜、部屋にもどれば、また避けられない現実が厳然とある。どつと罪悪感におそわれる。重くて、苦しくて、酒をあびるほど飲んで、いつか眠りにつく……。次の日も、

また次の日も…。

いよいよ、締切りまであと4日となった。もう動く気力もなく、布団に体を横たえている所に、親友からの電話。その声をきくと、A君は、今までため込んでいたものが、堰を切つたようにあふれだすのを感じた。心が動き始めた。彼は泣いた。泣いて助けを求めた。「来てくれ！手伝つてくれ！頼むから…。お願いだから…。」友人というのは、有り難いものである。自分の卒論のけりをつけた



友人が数名かけつけた。ユンケルをのみながら、不眠不休の共同作業が4日…。無事間に合った…。

実は、よくある話である。保護者の方でも、同じ経験をされた方が、もしかしたらいらつしやるかもしれない。とにかく、人は本当に苦しくなると、願望と逆の行動をしてしまつことがあるのだ。自分の願望をすててしまった訳ではない。「今の苦しさ(いつの間にかもう慣れてしまった苦しさ)を味わつ」だけで精一杯なのだ。その苦しさに耐えて、その上で願望に向かつて動き出す力が残っていないのだ。そして、天は厳格である。そういう日々に対しては、必ずや一層の罪悪感と挫折感、自己嫌悪をお与えになる。そうなのだ。決して、そういう日々を重ねて幸福にはなれないのだ。さて、受験生のみなさん！いよいよ目前に迫

ってきた受験シーズンを前に、A君と同じことをしていないか？「このままではまずい。」と分かつていながら、情眼をむさぼってはいないか？きみの願望は、もう色あせてしまったのか？きみがなりたい自分はそういう自分なのか？よく考えてほしい。覚悟を決めて、本当は自分はどうしたいのか考えてほしい。どうしなればいけないのか考えてほしい。

この一年、私は、高校3年生に英語と日本史を教えてきた。余り良い講師でもなく、余り良い大人でも、余り良い先達でもなかったかもしれない。それでもきみ達に伝えたいことは山ほどあつて、しかしうまく伝える力も言葉もなく、そして今きみ達と別れようとしている。後悔も多い。そういう私だが、きみ達に伝えたいことの一つが、勝負の時の心の持ち方である。とにかく、ほとんどの人が苦しいのである。仮に順調にいっていても、インフルエンザで一週間も寝込めば、途端に苦しくなる。そういうとき、ほんの少しの勇気が出せるかどうかで道は分かれる。毎日毎日、ほんの少しの勇気を出すのである。ほんの少しの勇気を出して、自分の願望(達成したとき心の底から喜べること)を思い浮かべるのである。「だめだったらどうしよう？」「と、まだ分からない仮定のこと、心をよぎつても、願望のほうを選ぶのである。その願望達成のために必要なことをやるのである。毎日毎日、ほんの少しの勇気を出して、そうするのである。それを続けるのである。続け

ることは、ものすごい成果をもたらす。そして、いつか、堂々と困難に立ち向かつていく用意ができてくる。

今からでもよい。毎日毎日願望を思い出し、それを大事にし、それに向かつて成すべきことを成すのである。これが古今東西人類普遍の原則である。必ず道は拓ける。きみには、きみ達には、その力と素質と可能性が十分にある。ほんの少しの勇気を出してがんばつてほしい。

最後に。苦しくてたまらないとき、行き詰つてしまった時は、私達に相談してほしい。愚痴も少しならきいてやれる。夢を追い、願望に向かい、挫折ながらもまた立ち上がるという点で、私達はきみ達の同士である。苦しいときはいつでも上り坂。頂点に到る道はいつも険しい。

(小林(健))

復習について

少し前まで、保護者面談で「予習と復習とどちらをやればよいでしょうか」とよく質問された。そういえば、このところこの質問が減ってきたように思う。もちろん、この質問への答えは、「復習」である。勉強でも、部活でも、実生活でも、何か新しいことを身につけようとしたとき、やらねばならないことは反復練習、すなわち「復習」である。話をしぼつて、テストで点数をとること、考えよう。たとえば、一週間後に英単語50語の予

ストをするとしよう。もちろん、全く知らない新出語だ。

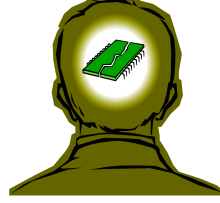
毎日7語ずつ練習する。

毎日50語ずつ練習する。

ずいぶん極端な話だが、この二つのうちどちらで勉強するだろうか。

を選んだ人は、残念ながら高得点は期待できそうにない。なぜなら、人間の記憶力には短期記憶と長期記憶の二つがあるからだ。有名なエビングハウスの忘却曲線によると、人間はその日に覚えたことのうち、約半分を翌日には忘れてしまうそうだ。その割合でいくと、のやり方では、テスト

ト当日に覚えている単語は前日に覚えた単語の半分、プラスいくつかで、5〜6語できる程度だろうか。これは、短期記憶だけで勝負しているからだ。



では、どうすれば長期記憶に変えられるのだろうか。人間が何かを記憶しようとする時、脳細胞の中に電気的・化学的な回路ができる。この回路は、一度だけではすぐに消えてしまうが繰り返すことで回路が強化され、なかなか消えなくなっていく。これが長期記憶である。ちょうど、野原で人が歩くとき一人が歩いただけはどこを歩いたかわからないが、何人もが毎日歩くと草が薄くなり、道ができるようなものだ。テストというものは、時間が限られている。限られた時間の中で解答を書いていくために

は記憶したものがすぐに出せるようにしておかなければならない。そのためには、反復練習による記憶がまず必要である。よく「数学は考えればわかる」というが、限られた時間で考えて解答を導き出すのは不可能に近い。大学入試でも自分の大学の数学科の教授が、自分の大学の入試問題を時間内で解いたところ、合格点に至らなかったという話があるが、これは笑い話でもない。時間内に解くためには、問題を見てすぐにどうすればよいか浮かばなければならぬ。そのためには、代表的な問題の解法がすぐに出てくるように反復練習を積み、つまり、復習あるのみということだ。(大場)

知るといふことは

今年もいよいよ受験シーズンに入りますが、数年前、ある私立高校の入試問題で出題された英語の長文が、論議を巻き起こしたことがある。それは修学旅行で沖縄を訪ねたある生徒のエッセイという体裁をとっていたのだが、その中の「(沖縄戦の様子を語り部に対し)しかし、私にとって、彼女の話は退屈に感じられた」という一文が、沖縄戦の被害者ならびに沖縄の人々の感情を踏みにじっている、として、激しく非難され、大きな社会問題となったのだ。結果的に高校側が謝罪する事態へ発展した。初めてその報道に接した時、私も「ずいぶん

無神経なことを」と怒りを覚えた中の一人だった。ところが、ずいぶん後になってから、実際に出题された英文を読む機会があった。このとき、私は、大変な驚きと大きな教訓を得ることとなる。そこに書かれていたのは報道の論調とは印象をまるで異とする、真摯なメッセージであった。以下に要約してみたい。

(要約) 沖縄で、私達が訪れたのは、当時の人々が米軍の攻撃から避難していた洞窟であった。中に入るとひんやりとしていて、その非日常的な雰囲気、私達は興奮し、おしゃべりを楽しんでいた。その時、ガイドの人がライトを消すように指示した。途端にあたりは真っ暗闇となった。私達は一瞬でパニックにおちいり、さっきまでの楽しい雰囲気は吹き飛んでしまった。ガイドの人は、その暗闇の中で、戦争の時にそこで起きたことを語った。私達は無言だった。洞窟を出ると、安堵の気持ちから泣き出す生徒もいたほど、私達には怖い体験だった。その後、私達は、沖縄戦を経験した女性からも話を聞く機会があった。しかし、彼女は話すことにとっても慣れていない様子で、その話、私には退屈なものに感じられた。

いかがだろうか。問題となった箇所は、それだけならば、不適切に聞こえるかもしれない。しかし、全体の文脈の中で読めば、非常に大きな意味を持つ一節である。この英文のテーマは、言語化されたもの(語り部の言葉)と、非言語的なもの(洞窟での体験)とを比較しながら、

戦争を知らない世代が戦争の記憶を継いでいくためにはどんな方法がありうるのかという問題の提起である。そこには、沖縄戦の被害者を貶める意図など微塵も感じられない。大変にすぐれたエッセイであり、もつと読まれてしかるべきだと個人的には思う(ただし入試問題としては不適切という批判には納得できる部分もある)。



ところが、報道では本文の内容については一切触れられず、先の一節について憤っている人たちの側からの論調のみで構成されている。断言していいが、この問題を報じたマスコミ関係者は原文を読んでいない。読んでいけば、文章のプロである彼らが趣旨を汲まないわけがない。このように、情報とは不完全で一方的なものである。私は、以前ある経験から、伝え聞く情報には必ず何らかのバイアス(偏り)が存在することを実感しているが、物事をとらえるには必ず複数の視点が必要であると思う。賛成でも反対でも、まずはそれらの視点がなければ像は立体的には浮かび上がらない。この英文の件はさらにその思いを強くさせるものであった。しかし、そんな折、私は通勤電車の中で何げなく見かけたある広告に目を疑った。そこには、信じられない内容が書かれていたのである。(以下次回掲載時に続く) (関)